5.6.　　「ウィーンの風（その２）」

「ウィーンの風」への投稿は数回だけの気持ちで始めた。少なくとも（その 1）での「山事情シリーズ」で終わるつもりだった。が、会員の職員から「(会報の他の部分は殆ど読まないが）小西さんの記事は楽しみ」とか、ある日本人知人宅を訪ねた際に「『ウィーンの風』に書いているのはこの小西さんなの？」と娘さんに言われたりで続けてきた。興味を持って読んでくれているらしい風の噂が次の記事を書くエネルギーとなった。話の内容に華を添えるとともに間違いのないようにと、ドイツ語の資料に目を通す必要な場合もあったが、それが勉強にもなった[1]。（その２）はそんな訳で書きつづける覚悟をしてからの後半（2002.7 以降）の記事である。

「静けさ」と言う財産
オーストリア 1000 年とウィーン
１５８２年１０月１４日のオーストリアで何があったか？
「くだらない」「酒」
鷲鳥（ガンズル）の季節
ジルベスター
少なくとも世界遺産は訪ねよう
U5：幻の地下鉄五号線
戦争と平和
「恋人よ、さようなら」

[1] それでも勇み足をしたこともある。「ドイツ語で金曜日はフライターク、つまり自由の日（自分の日）。金曜日が休日のイスラム社会が歴史の原形を留めているのか」と推論を紹介したら、「それは完全な誤解、旧約聖書の説話に由来し、意味はこれこれ。さらにこれこれ」と読者の一人から厳しい指摘を受けた。「知ったかぶり」はいけません。

11)　「静けさ」と言う財産

見落しがちな「安全」をオーストリアで楽しみたい、と前回書いた。今回は同じ趣旨で「静けさ」について。

「音楽の都ウィーンは音にうるさい」とは来る前から耳にしていた。来てそれを実感した。例を挙げる必要はないだろう。慣れてみると如何にそれが大切か、社会資産かと思う。味わいたい。

この春一時帰国して久しぶりの車内放送にその「日本的親切さ」を思い出した。「次の停車駅は…A駅とB駅は通過…　乗り換えは…　お出口は…」「忘れ物の無いよう網棚の上､座席の下…　間もなく…駅です。お出口は…」「携帯電話は他のお客様の迷惑…　電源を切って…　皆様のご協力を…」

微細にわたり、駅発着前後に繰り返し注意してくれる。車内にはいくつも拡声器があるのに、端から反対の端の乗客にまではっきり届くような大声が耳に突き刺さる。携帯で密かに話す局所的な会話より余程大音量なのが滑稽である。隣席の家族との会話のため、自分の音量が上がる。駅に着くとほぼ同じ内容をウグイス嬢とホームの駅員が繰り返す。下車したホームでは構内放送のためその携帯が使えない。繁華街では商品販売や客呼び寄せのスピーカが溢れ、レストランでは店員好みとしか思えないテレビ番組が幅をきかせている。

それに比較し、オーストリアは実に静かである。車内放送は極めて簡略で、乗客の間に会話が成立している。主要駅から発車する国際長距離列車の案内も、うっかりすると聞き逃す程度の簡略さである。構内放送はない。発車ベルもない。街で気付くのは「人工音の少なさ」である。街頭のスピーカはもちろん、客商売のレストラン、ホイリゲでもＴＶは見かけない。車のクラクションも救急車以外では五年で十度も耳にしたか。市街地の大型車は清掃車とバス以外見ない。日本では博物館的存在になった路面電車が市民の主要で静かな足である。だから一歩郊外へ出ると、聞こえるのは小鳥の囀り、犬の吠え声、風音だけという自然がある。ヌスドルフの我が家ですら、夏の朝など窓から聞こえる小鳥の声で目覚めることがある。これが「落ち着き」を与えてくれる環境であり街の財産であると市民は自覚し、その維持に自制心と金を使っている。第一の都市ウィーンでこうだから、地方の都市、郊外の「自然の中」が如何に静かか味わってもらいたい。

日本も「安全」では誇れる、と前回書いた。が、「静けさ」では威張れない。特に都会では。こちらに居る間に大いに「静けさ」を楽しみたい。(2002.7)

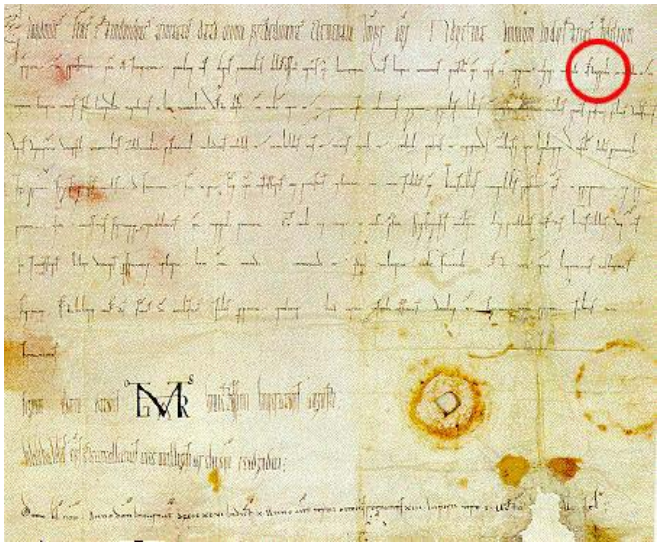
12)　オーストリア 1000 年とウィーン

シリング貨が７７歳の生を終えて半年になる。ようやく生活に馴染んできたユーロ貨のコイン面に

発行国の特徴ある図柄があるように旧２０シリング貨の一面には発行年の歴史が刻まれていたのをご記憶の人も多いだろう。1995 年の図柄はクレムスの教会だった。そして「1000 Jahre」の刻みが入っている。「建国 1000 年」の意味である。その背景を探ってみると...。

962 年、ドイツ皇帝オットー一世が法皇から冠を受けて「神聖ローマ帝国」が発足する。983 年には三代目のオットー三世が即位する。日本では平安後期、藤原氏全盛の頃である。

その頃、あちこちで小競り合いの戦が絶えず、特に西進の機を窺っていた東の騎馬民族マジャール人の脅威は小さからぬものがあった。小さな領国単位で城を築いては領主の元に自国の防衛を図ることが必要だった。976 年、Bamberg（バイエルン）出身のルイトポルト（現在名レオポルド）は現在の Enns と Traisen に挟まれる地区（ローワーオーストリア）の領主となる。バーベンベルクの名は Bamberg に由来する。ルイトポルトの死後、994 年に位を継いだ息子のハインリッヒは領土継承権を確実な物にするために皇帝オットー三世の「お墨付き」を求める。



その「お墨付き」古文書がオーストリアの建国元年の証とされている。オットー三世の署名（写真左下Mの部分）と印鑑（落款）（写真右下◎）があるなめし皮の文書中に「領主ハインリッヒの領土にある通称オスタリッチ Ostarrichi の地を...」の文字（写真右上○部分が Ostarrichi）が読み取れるからである。この文書が見つかったのがクレムスの教会だった。オスタリッチは「オーストリア」の古称である。なお、クロスターノイブルクにあると言う「ハインリッヒの肖像画」は数世紀後の作品である。

以来領土は安定し、1156 年にハインリッヒ二世が住居を定めてウィーンの歴史が始まる。皇帝オットーの王冠は現在ウィーンの宝物殿に保存されており、その頭部の形はクロスターノイブルク教会のあの丸いドームの原型である。1246 年、時のフリードリッヒ二世が戦死し、嫡男のなかったバーベーンベルク家は絶え、ハプスブルグ家統治のオーストリアが始まる。

疑問がひとつ。「オットー三世の署名」は 996 年と聞いており、「建国 1000 年祭」が開かれたのも 1996 年だったのに、記念貨幣はなぜか 1995 年。理由は調べきれていない。ちなみに、1996 年の記念貨幣図柄は「作曲家ブルックナー死後 100 年」だった。(2002.8)

13)　１５８２年１０月１４日のオーストリアで何があったか？

日本では戦国時代、安土桃山から関ケ原への波が静かに激しく動いていた。その頃ヨーロッパでは宗教改革の軋みがあちこちで火を噴き、燻っていた。そしてオーストリアではトルコ来襲の脅威に苦しんでいた。

１３世紀以来神聖ローマ帝国皇帝を兼ねたハプスブルク家は最盛期。時の君主はルドルフ二世。トルコ撃退への援助を求めるオーストリアのカール二世の訴えを受けて、アウグスブルグで諸侯鳩首会議が始まったのが 1582 年７月２日。皇帝のそれまでの反改革主義的な姿勢に対して新教派が持っていた不満が伏線となって軍上金調達方法で新教旧教派が対立する。

７月半ば教皇グレゴリオ十三世は、ドイツの数学者エラスムスが 1551 年に計算した暦（一年が 365.2525 日）が科学的により正確だとして新暦採用を勧告。それを受けて皇帝ルドルフ二世は９月半ば、「10 月 15 日付けで新暦移行」を決める。が、新教派は教皇の態度が強圧的だとして反発。「新暦採用は純粋に科学的根拠から」との皇帝説得にも応じず、新暦採用を拒否する。

諸侯鳩首会議は 9 月 20 日閉幕。対トルコ戦支援では合意が成ったが新暦採用に関しては決裂のまま。かくして新暦移行は旧教派の国でのみの実施となり、同年 10 月 4 日（旧ユリウス暦）の翌日が 10 月 15 日（新暦）として現在のグレゴリオ暦が始まった。したがって 10 月 5 日－14 日は（オーストリアでは）歴史上存在せず、題名の問題への解答は「解なし」となる。現在の閏年が始まるのもここからであることは周知のことである。

なお、新教派に対して教皇は半年間の移行猶予を認めたが新教派はこれにも納得せず実際に新暦に踏み切るのは 1700 年と手元のレキシコンにある。シーザー以来の旧ユリウス暦がその後約 100 年あまり共存したことになる。他の新教国でもかなりの間混乱があったようだ。この頃の文書を読むには注意が要るだろう。日本での明治六年の新暦移行時にどんな混乱（もしあったら、の話だが）、どんな行政措置があったのだろう。(2002.9)

14)　「くだらない」「酒」

酒についての話題は多いが書くには躊躇する。「好き」ではあるが他人に講釈するほどの見識はない。が、興味ある話題ではあるので取り上げることにした。ただしワインではない。ワインやモストについてはどなたか造詣ある方から「楽しみ方」をご教授いただけるとありがたい。

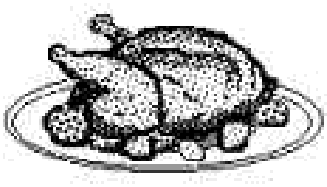
最近司馬遼太郎の「菜の花の沖」を読んだ。江戸後期、淡路国の貧農に生まれ船頭から幕府の北方開発の先導役として活躍する高田屋嘉兵衛と言う男の物語である。その小説から「くだらない」話を拝借する。

家康が城を開いて以来、江戸は政治・文化の中心として栄えた。が、物の生産と言う点では遅れていた。江戸はもっぱら大消費地として大坂（上方）から輸送される食糧を胃に入れていた。米も味噌も、醤油もそして酒もである。嘉兵衛が船乗りとしての人生を始めるのも、江戸への酒を運ぶ樽廻船からだった。消費地江戸では「上方から運ばれて来る（つまり『くだって来る』）品物」が上等品として珍重され、関東平野で未熟な技術から作られる（つまり『くだってきたわけではない』）品物は「くだらない」低質品として扱われた。「くだる」ものが立派だったのだ。こうして伏見、灘の酒が江戸の喉を潤わせてきた。

一方で、日本酒は「振動」で味がまろやかになる、と言う説をかって耳にした（司馬遼太郎説ではない）。大坂から江戸へ船で運ぶ辺りが適当な振動だと言う（昔の船は揺れるのが常識だった）。それに対して、ビールは振動を嫌うそうだ。だから、生産地で飲む地ビールがもっとも美味しい。札幌ビールも東京では東京工場での製品が良いと言うわけだ。では振動に関してワインは日本酒に近いのか、ビールに近いのか。私はビール説に投票したい。地元で飲むワインがやはり美味しいのではないか。それは、振動と言うより、天候であり、一緒に食する食べ物であり、文化・環境も含めた「総合力」としての「酒の雰囲気」が地元にこそあるからだろう。こちらに滞在する間に多いに地ワインを楽しみたい。もっとも私自身は「酒は地元で」に拘るほどの凝り性はなく、どこででも頂く融通性を幸い（？）持ち合わせている。それでも、帰国した後「ワインを飲みにウィーンに来る贅沢」も味わってみたいと思っている。

主題と離れるが「菜の花の沖」では、嘉兵衛壮年時に幕命を受けて北海道から北方四島にかけての探検と当時の現地事情についても司馬遼太郎は考証している。北方領土の歴史背景を知る格好の入門書である。一読を勧めたい。(2002. 10)

15)　鵞鳥（ガンズル）の季節



毎年十一月は鵞鳥の季節である。と言っても渡り鳥がやってくる訳ではない。「食べる」季節である。「土用のうなぎ」とでも言うところか。が、暑気あたりを避けるといった健康上の理はなさそうである。四世紀、今のハンガリーGyoer に生まれ、鵞鳥のお陰で「聖人」になった僧マーチンに由来する。

ある冬の寒い日、Armiens の街の門で寒さに震えていた物乞いに彼は自分の外套を分け与えたことから、街の人は彼を慈悲と隣人愛のシンボルと崇めるようになる。ぜひ「僧として導いて欲しい」と頼む。が本人は謙虚で、僧職には向かないと固辞したが周りの人は「どうしても」と彼を司教に推す。困った彼は身を隠し、誰か別の人が見つかってくれと祈っていた。隠れた場所が鵞鳥小屋でなければ上手く行くところだった。最後の瞬間に鵞鳥の鳴声で所在がばれて、聖人への道を歩かされることになる。

かくして聖マーチンの日「11 月 11 日」を中心にこの鵞鳥の季節がやって来る。なぜ「食べる」習慣になったのかはっきりしないが、とにかくあちこちの飲み屋で鵞鳥（ガンズルまたはガンズ）の特別メニューが出る。ある店のちらしに「こんがり焼けてたっぷりとバターのかかった柔らかいこの肉を口にすれば、このよだれを誰に感謝すべきかが自ずと分る」とあった。いかにも美味しそうである。ザウアークラウトとクネーデルが付くことが多い。オーストリア全体の習慣だそうだがハイキング仲間とチェコまで出掛けたこともあるし、ドイツ南部でも味わえるらしい。私にはチキンのウェルダンと味に大差はないと思うが、ワインの季節でもあるので良く合う。美味と言って良い。職場の仲間で毎年楽しみに出掛ける。われわれには「一羽まるまる」は大きすぎるから、「ハルプ」か「フィアテル」が適当だろう。勿論ワインはお好きなだけどうぞ。

ところで犬に対する狼、豚に対する猪に相当するのが鵞鳥に対するハイイロガンと呼ばれる欧亜北部に棲息する水鳥だそうだ。おしどり以上に夫婦愛の強い鳥らしい。ところがこの鳥類に人間世界の夫婦関係を考えさせられる習性があると最近の書物で読んだ。紙面を割く余裕はないが、動物行動学に興味ある人は調べてみると良い。(2002.11)

16)　ジルベスター

毎年大晦日には、リングシュトラーセを周回する市民マラソンがあるのはご存知の方が多いだろう。私も年末をウィーンで過ごす年には良く出る。一周約５㎞なので手頃な距離である。ある年、参加料を払って正式の背番号をつけた犬が飼い主と一緒に走っていた。犬は飼い主を振り返り振り返り走っていた。どちらが伴走役だったのか。沿道、ゴール地点での歓声は「人一倍」高かった。後日の記録報告書には「犬の部：参加総数１、第１位＊＊＊、年齢不詳、国籍オーストリア」と載っていた。

ジルベスターの催しはこの他にも多彩である。ラートハウスプラッツを起点にリング内には屋台が並び、（赤）ワインをレモンジュースと砂糖で「割った」プンシュと称する甘酸っぱい飲み物が幅を利かす。夕方から夜に懸けてステファンスプラッツ周りが賑やかになる。音にうるさいウィーンには珍しく空気ラッパが鳴り、爆竹が飛び、ドームの大鐘が鳴り響く。ドーム内ではパイプオルガンを背に、厳かな説教がある。非信者の私だが、時々拾えるドイツ語の説教を語学的に楽しんだことはある。夜には花火が上がる。ウィーンは花火の歴史でも由緒あるそうだから一見の価値があるだろう。早起き鳥の私には深夜まで起きて待つエネルギーがない。来墺の初暮れに丘の中腹にあった知人宅に招待され、市街を見下ろして遠く眺めたのが最初で最後である。今年は「見納め」と思って起きていたい。

この初暮れの夜は雪だった。知人宅のベランダは自然の冷蔵庫であり、冷えたビールの味を今も思い出す。やはり雪で白いと雰囲気が出る。内陸だけに雪はほぼ例外なく乾いた粉雪で気持ち良い。楽しめる冬のウィーンである。

やはりこの初暮れの翌朝、つまり元日の朝、新春コンサートに家内と出掛けた。が、残念ながら楽友協会ではなくラートハウスプラッツである。夏の映画祭にも使われる大スクリーンに映し出される演奏と舞踏を、完全防寒スタイルで雪に降られて立ち見していた。翌二日は早速出勤日。同僚から朝一番に「お前、昨夜テレビに出てたな」と言われてキョトン。何事かと質してみると「今日のウィーン」なる夕方の報道番組にラートハウスプラッツでの立ち見姿で登場したらしい。女房に報告すると「ぜひ見たい」とねだる。「出掛けるから録画を見せて欲しい」と放送局に手紙を書いた。返事がないまま、一ヶ月後にビデオテープが届いた。しかし、ヨーロッパのビデオは方式が違う。こうなったら見たい。結局、一分のビデオを見るために、数万円のセットを買う羽目になった。(2002.12)

17)　少なくとも世界遺産は訪ねよう

世界遺産は2001年末現在全部で約700件指定されている。オーストリアには次の8件がある（括弧内は指定年)。個々についての詳しい解説は別書に譲るが、滞在中に一度は訪ねておきたい。何れも世界遺産とは意識しなくても訪ねる機会が多いだろう。訪ねたらなぜ世界遺産になっているかを考えて見たい。

i)　ザルツブルクの歴史ある市街地（1996年）：その名の通り、近くには岩塩の鉱山が多い。Halleinでは旧岩塩鉱のツアーもある。「塩漬け」の完全なミイラが発見されている。

ii)　シェーンブルン宮殿と庭園（1996年）：併設の動物園はかっての皇室お狩り場の名残である。歴史的な幾つかの会議がここで開かれた。ハプスブルク家の長い歴史もここで閉じた。

iii)　ザルツカンマーグートの景観（1997年）：ハイカーならHallstatt-Dachstein地区を訪ねたい。氷河あり、ドレミの歌あり、自然を大事にする気持が自然に起こるだろう。日本もこうでありたい。

iv)　センメリング鉄道（1998年）：ウィーンから南への鉄道に乗ると通る。世界最古の山岳鉄道という。大きな勾配と曲率の路線、高く聳える橋脚は鉄道ファンのみならず郷愁を覚える風景である。列車の速度が遅くても気にならない。SLの姿を想像するだけでも楽しい。平行してハイキングコースがある。鉄道はイタリアのTriesteまで通じている。

v)　グラーツ市の歴史ある市街地（1999年）：１２世紀に始まる歴史、西からのトルコ侵略に対する防壁とウィーンとの共通点は多い。中世の雰囲気を保つ街並みの中で「古強者の夢の跡」を思いつつ今の平和に感謝したい。

vi)　ヴァッハウの景観（2000年）：私のお勧めは山の上の古城Duernstein。地元のワインが美味しくて、身の代金待ちの幽閉期間を楽しんだという当時のイギリス王の話が残っている。冬季の凍結路面には注意要す。渓谷沿いにはWeissenkirchen等白ワイン産地が続く。ドライブなら右岸左岸往復で異なった景観が楽しめる。

vii)　ウィーンの歴史ある市街地（2001年）：市発行の広報誌「A to Z」によると３００余りの「見るべきスポット」がある。滞在中にどれほど行けるか。これには非売品だが、ある邦人先輩（故人）の名邦訳がある。電子版が完成間近のまま未完で埋もれているのが惜しまれる。

viii)　ノイズィードゥラーゼー周辺（2001年）：これはハンガリーとの国境を成すこの国最大の湖。海のないこの国の人は「海水浴」の気分で訪れる。ブルゲンランドはもともとハンガリーに属し、したがって文化の共通点も多い。周辺は赤ワインがお勧めである。

因みに日本では11件が指定されている。法隆寺地域の仏教建造物、姫路城、屋久島、白神山地、古都京都の文化財、白川郷・五筒山の合掌造り集落、広島の平和記念碑(原爆ドーム)、厳島神社、古都奈良の文化財、日光の社寺、琉球王国のグスク及び関連遺跡群。（2003.1）

18)　U5：幻の地下鉄五号線

ウィーン市民に欠かせないUバーン。なぜ五号線がないのか。計画中断なのか、それとも別に理由が？Uバーンの歴史を調べてみたのでその調査結果を。

ウィーン地下鉄の歴史は１９世紀末に溯る。路線も駅舎も車体もあのオットーワグナーの設計が基本にある。Hietzing (U6)が代表とされるが、他にも U4 や U6、S45 の幾つかの駅舎にその面影が残る。当時は石炭を燃料とする汽車だった(写真は開通当時の Gumpendorferstr 駅ホーム)。「地下鉄」らしくなるのは第一次大戦後の燃料不足で運転が中止された後、電化されて一部だが再開した 1925 年から。当時の路線図を見ると現在の U4 と U6 の中央部が基本になっている。第二次大戦で再び殆ど壊滅する。

1955 年に独立を取り戻したオーストリア、そしてウィーンは急速に復興の道を進む。地下鉄も例外ではない。一部トラムを地下に走らせる過渡時期もあったが、1960 年代には本格的なUバーン計画が固まってきた。第一陣の U1 (新線)、U2 (旧トラム地下線拡張)、U4 (旧線転用)は 1969 年に建設が始まり、1982 年に完成。U6(旧線拡張)、U3((新線)の開通は 1989 年、1994 年だからつい最近である。

これで現在の路線がすべて登場した。U5 がない。着任してから七年、周りのウィーンっ子に何度か聞いたが誰も知らない。本稿を書くに当たって U4 駅の窓口や Stephansplatz の地下鉄ⓘの職員にも尋ねまわったが何れも「考えたこともない、知らない」のだから謎であって当然である。調べて見るとやはり歴史はあった。なぜ無いのかの歴史が。

地下鉄復興計画立案の 1960 年代に戻る。U5 計画路線は Hernals (現 S45)を起点に Alser Strasse (現 U6)- Schottenring (現 U2/U4)- Praterstern (現 U1)からドナウ河最下流の橋 Stadlauer Brücke 迄として決まっていた。採算性疑問でこの原計画が縮小から廃止になって以来、新路線案が出ては消えを繰り返して現在に至っている。（詳しい経緯はhttp://mailbox.univie.ac.at/~prillih3/metro）

地下鉄網の拡充は今も続いている。U5 の計画も消えてはいないらしい。手元の資料によるとウィーン市交通局の最新青写真（建設時期 2015-2020）では....

U2 の北側は Schottenring から伸びて Praterstern で U1 と交差した後 Stadlauer Brücke でドナウを渡り 22 区の Hausfeld まで。これは既に工事が始まっている。南側は Rathaus から向きを南に変えて市南部の Wienerberg に延長する。そして U5 は Hernals (現 S45)- Alser Strasse (現 U6)から Rathaus に出てから現 U2 の下半分を引き継ぎ Karlsplatz まで(手元の資料では七代目の案)。場合によってはこれも計画中(ベルベデーレの近く？)のウィーン中央新駅が実現したらそこまで伸ばす。と言うわけで「U5 は幻ではなく難産」ということらしい。（2003.2）

19)　戦争と平和

イラクを巡る交戦論、和戦論が渦巻いている。何れも「正論」を主張する。いつの時代も同じである。今、トルストイを語る訳ではない。戦いの跡を思い起こして平和を楽しみたいのである。戦争の跡はウィーンのあちこちにあることはご存知であろう。フラクトゥルム、犠牲者碑等々。

「安全と安心（2002.6）」の冒頭で元外相（のち首相）レオポルド･フィーグルの名に触れた。1955 年 5 月、連合国側との間で署名を交わした独立文書をベルベデーレ宮殿のテラスから高々と市民に示す姿は誇りと喜びに満ちている（写真）。

そのベルベデーレのシュバルツェンベルクプラッツ側に銃を胸にして凱旋旗を掲げたロシア兵士の像が建つ。大戦末期、「解放ウィーン」立役者の証としてウィーンの鋳物工場の尻を叩いて突貫工事で鋳込んだと耳にした。何かと「えげつない」その頃のソ連だが、オーストリアの「中立」を主張し「戦争参加責任条項削除」を最初に支持したのがそのソ連外相モロトフだったことはあまり知られていないのではないか。

戦後のウィーンの雰囲気を伝える「第三の男」はウィーンっ子には受けない映画だそうだが、私の年代層には懐かしい。改修のためか現在見学ツアーが中断されていて残念である。

ウィーンとヒットラーの関係は多く書かれているから触れないが、あるハイキング仲間が「彼の跡」を辿る散策ルートと、関連する報道記事の復刻版を紹介した小冊子（英語、非売品）が手元にある。

ウィーンの南に高度 1743mの Hochwechsel と言うなだらかな山がある。ハイキングで行ける山である。低オーストリアとシュタイアマークの境界にあり、「最後の野戦」があった場所である。山の上の教会には 35 名の有名、無名戦士が眠る。1945 年 5 月始めの降伏後もソ連軍との野戦が続いていたそうだ。平和にハイキングのできる今がありがたい。

ノイズィードゥラー湖の南端、ハンガリーとの国境近くに Moerbisch という村がある。湖畔の野外劇場が有名だから夏の演劇祭に出かける人も多いだろう。直ぐ先が国境である。鉄のカーテンが綻びたところである。かってはここに軍装の兵士が多く警戒に立ち、ピリピリしていたであろう緊張状態を想像しつつ今は当時の面影も感じない穏やかな平原を見るとつくづく平和がありがたいと思う。自由に行き来し、自由に物が言えて、家族が一緒に住めて、、。

今世界を二分する和戦両論を見て、国土を何度も戦火で被ってきたヨーロッパに避戦志向が強いのもうなずける。焦土経験の有無で和戦への感覚が異なるのはわが国内を見てもわかる。(2003. 3)

20)　「恋人よ、さようなら」

「恋人」とは何だろう。いつも一緒に居たい、しばらく間があくと会いたくなる。そんなものか。「恋人」と一緒になれれば幸福感一杯である。「世界は二人のため...」なんて唄いたくなるだろう。「惚れた恋人が自分のもの」と思うことで心が浮き浮きし、他人に見せたい気持ちとそれを惜しむ気持ちが入り交じる。ずっと自分の傍に置きたい、他人には渡したくない、その素晴らしさを「少しだけ」他人に垣間見せることで「羨んでもらいたい気持ち」が心の底にある。

一目惚れの「恋人」もあれば、煮物のようにじっくりと味が染み込む仲もある。ところがどんなに惚れた間柄も四六時中一緒に居れば鼻に付くこともある。逃げ出したくなることもある。「恋人は遠きにありて想うもの」なのか。いつまでも新鮮な「恋人」であるためには時々会える仲の方が良いのか。

持って回った書き出しになったが、ウィーンの街、オーストリアでの生活がそんな「恋人」だろうとかなりの確信がある。私の場合は「山」も当てはまる。しばらく逗留したことでその良さ、快適さを空気のように感じ、その存在感を忘れがちになりつつあった。

その恋人との別れが近づいてきた。日本に戻って別の恋人に会う楽しみもあるが、この恋人ウィーンにもまた会いたい。この七年間の付き合いは生涯忘れないだろう。正直言うと、こんな素晴らしい恋人に会えるとは思っていなかった。期待以上の美しさ、感動が待っていた。山、自然、人、文化、ワイン。それが今まで続いてきた。恋人にはいつも上機嫌（好天）でいて欲しい、不機嫌（雨天）だとこちらまで気が滅入る。「老いらくの恋」だったかも知れない。自分が老い行くのを忘れて恋人にはいつまでも美しくあって欲しい。恋人の面影は時とともにますます美しい思い出に昇華して行くだろう。こんなに素晴らしい恋人なのだから、他人には渡したくないなどと吝嗇にならず多くの人にその素晴らしさを大いに楽しんでもらい、分かち合いたい、もっと大事にしてくれる人、味わってくれる人に紹介したい。

日本に帰って、遠くから想う恋人は身近に付き合ったのとは違った美しさ、別の感動を与えるだろう。その恋人に身近に接する人達に嫉妬心を持つかもしれない。私もまた時には恋人に会いたい。「会う」ことが出来ぬなら、その雰囲気だけでも味わえる境遇に自分を置きたい。「気障な言い方をするならそれが惚れ合った夫婦というものじゃないか」という文章が小説にあった。「あんなに良い女、二人と居ない、なんで消せよう恋の、恋の火を」という演歌もあった。「そして一言、この別れ話が冗談だよと笑って欲しい」「また来るときにも笑っておくれ」。読者諸氏には「末永く、フレッシュな気持ちで」恋人を慈しんで頂きたい。

愛読に感謝します。拙いエッセイは本稿で「了」とします。任務を終えて近々帰国します。(2003.4)